

## 欧米小型高級客船に照準 和 문화で「コト消費」つかむ 佐賀県唐津市

古来、大陸との交流窓口となってきた佐賀県唐津市。玄界灘に臨むこの街にクルーズ船の入港が続いている。

この10月、米国の「スター・レジェンド」やドイツの「ブレーメン」を含め5隻が入港した。約50<sup>\*</sup>。離れた隣県の博多港には月平均30隻(2017年実績)が入港していることからすれば、わずか5隻だが、去年は1年間で3隻だった。

もう一つ、特筆すべきことがある。博多港には中国発着を中心に16万ト<sup>ン</sup>級、乗客4000人超の大型船が多く寄港する。対して唐津東港に寄港する外国船籍クルーズ船は1、2万ト<sup>ン</sup>クラス、乗客も二百数十人だ。

“爆買、など経済効果はそう望めない。だが、ここに唐津ならではの戦略がある。

市内には5万ト<sup>ン</sup>級の船が接岸できる妙見埠頭があるが、こちらは貨物船が中心の物流港。時折、クルーズ船も寄港するが、旅情を満たす風景ではない。

そうした中、2016年4月、唐津東港に耐震岸壁が整備され、2・6万ト<sup>ン</sup>級も接岸できるようになった。これを好機と、唐津市と佐賀県は欧米の富裕層をターゲットに、独自のポートセールスに乗り出した。

クルーズ船は3ランクに分類され、スター・レジェンドなどは最上級のラグジュアリー船とされる。乗客は「モノ消費」ではなく「コト消費」、文化体験を重視する客層である。

唐津東港へのクルーズ船は、舞鶴城と称される唐津城や国の特別名勝虹の松原を眺めながら入港し、船を下りれば、日本の茶陶を代表する唐津焼、茶道、人形浄瑠璃、海山の和食など、旧城下に息づく和の文化を満喫することができる。外国人の心を捉える観光・文化資源を備えている。

地方にとってブームはブームなりに有益だが、持続可能な地域づくりにつなげていくためには、地域固有の文化、風土の上に立った中長期的な戦略が必要だ。

海、港という観光インフラは限られた地域にしかない。その優位性を生かす時が来ている。

佐賀新聞社 唐津支社長兼論説委員 吉木正彦

